

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520646

研究課題名(和文)映像作品を利用した日本語教育の体系化と授業デザインの研究

研究課題名(英文) Research on the Systematization and Class Design in Japanese Language Education Using Video Work

研究代表者

保坂 敏子 (HOSAKA, Toshiko)

日本大学・総合科学研究所・准教授

研究者番号：00409137

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本文化や日本語の学習リソースとして真正性の高い映像作品(映画・ドラマなど)の効果的な教育利用を目指して、(1)映像作品の利用に関する理論的・実践的な体系化を図ること、(2)多様な授業デザインの可能性を明らかにすることを目的とする。

まず、映像作品を利用した外国語教育の先行研究や実践例、著作権について調査を行い、教育利用目的の体系化を検討した。同時に「話し言葉」「文化」「メディア・リテラシー」「構成主義」に分かれ、授業デザインの枠組みの検討と実践研究を行った。本研究により、日本語教育における映像作品を利用した授業デザインの指針を示すことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to aim for the effective educational use of high authenticity video work (movies, dramas, etc.) as a learning resource for Japanese culture and the Japanese language by (1) attempting the theoretical and practical systematization regarding the use of video works, and (2) revealing the potential for diverse class designs.

First, previous research, practical examples, and copyrights for foreign language education using video work were investigated and the systematization of the purpose of educational use was considered. At the same time, "spoken language", "culture", "media literacy", and "constructivist learning" were chosen as themes for consideration of frameworks for class designs and practical studies. This research was able to provide a guideline for class designs using video work for Japanese language education.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：映像の教育利用 映像作品(映画・ドラマ・アニメ) 授業デザイン 体系化 構成主義 客観主義

1. 研究開始当初の背景

近年、日本の映画やドラマ、アニメなどの映像作品が世界中で広く親しまれている。日本語学習者の中には、これらが日本語学習のきっかけや動機付けとなっている場合も少なくなく、国立国語研究所が海外で行った「日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究」(2002,2004,2005,2006a,b)や保坂他(2008)などで、映像作品が教師や学習者の双方から学習リソースとして期待されていることが分かっている。しかしながら、映像作品の教育利用に関する研究は、実践報告や教材の多い英語教育に比べ、日本語教育ではその数が少なく、教育現場でもまだ十分に活用されているとは言えないのが現状である(保坂・長谷川他2004、金田他2006、築島2006)。この問題を解決することは、日本語教育や日本文化の普及において喫緊の課題であり、映像作品の有効活用に焦点を当てた研究が必要だと考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、日本文化や日本語の学習リソースとして真正性の高い映像作品(映画・ドラマなど)を日本語教育で効果的に利用することを目指して、

- (1) 外国語教育における先行研究や国内外の日本語教育現場の実践例を収集し、多面的な分析と考察を通して理論的・実践的に体系化を図ること
 - (2) それを基に、様々な目的に応じた授業デザインを試みて、実践的な検証を行い、映像作品を利用した多様な日本語教育の可能性を究明すること
- の2点を目的とする。

3. 研究の方法

<平成23年度>

- (1) 外国語教育(英語・韓国語他)における映像作品利用に関する先行研究と理論的枠組みの調査 認知心理学、メディア・リテラシー、カルチュラル・スタディーズ、構成主義、記号学的映像論等
- (2) 国内外の映像作品を利用した日本語教育の実態調査と実践例の収集 文献・アンケート・インタビュー・観察調査の実施。調査場所は、日本、ヨーロッパ、ベトナム、韓国、香港。
- (3) 授業実践による調査研究
- (4) 映像作品の授業利用に関わる著作権の調査

<平成24年度>

- (1) 国内・海外の映像作品を利用した日本語を含む外国語教育の調査 →文献・教材・実践例の調査、学会等での情報収集の実施。
- (2) 授業実践による調査研究
- (3) 映像作品の授業利用に関わる著作権の調査
- (4) 収集したデータの分析と体系化 →「話

し言葉」「文化」「構成主義」「メディア・リテラシー」の4領域と「文献」に分かれて検討。「話し言葉」「メディア・リテラシー」班は、外国語教育における映像作品利用の意義の検討し、教育目標のタキソノミー(Bloom 1956)等を参考に授業デザインの分類の枠組みを検討。「文化」と「構成主義」は実践的な研究を踏まえた体系化を検討。「文献」は収集した文献から実践例の抽出と分類を検討。

<平成25年度>

- (1) 構成主義に基づく実践例に関する勉強会 →ドイツの専門家による講演と討論。
- (2) 映像作品の授業利用目的の体系化 →教育目標のタキソノミー(Bloom,1956)と改訂版タキソノミー(Anderson et al. 2001)を参考に体系化を検討。
- (3) 各領域毎の授業デザインの枠組みの構築
- (4) 授業デザインの考案と実践・評価研究
- (5) まとめ →文献リスト、関連著作権、映像作品利用の意義、授業目標の体系化、各領域の授業デザインの枠組、実践の評価などの研究成果をまとめた報告書の作成。

4. 研究成果

平成23年~25年の3年間に亘る研究で、日本国内や海外の日本語教育現場における映像作品利用の現状と問題点の一端を明らかにすることができた。また、映像作品の教育利用の体系化を図ることで授業デザインの大枠を提示すること、並びに、映像利用の目的領域ごとに授業デザインの理論的・実践的な枠組みを構築し、それを具体化した授業デザインを蓄積することができた。さらに、映像作品の授業利用に関わる著作権の問題を明らかにすることができた。

香港、ベトナム、ヨーロッパで実施した海外調査では、「映像作品の利用の仕方が分からない」、「いい教材が分からない」、「準備に時間がかかる」など、映像作品の授業利用に困難を感じている教師が未だに多いことが分かった(雑誌論文、学会発表)。利用の方法については、客観主義的学習観を背景にしたものが多く、構成主義的アプローチによる授業利用は少ないこと、ただし、香港だけは構成主義的学習を具現化した実践が見られるようになっていたことを明らかにすることができた。香港は、SARS(Severe Acute Respiratory Syndrome、重症急性呼吸器症候群)の流行で大学が休講となり教室での授業が行えなくなったことを契機に、教室外の遠隔地に分散している学生たちをICTで繋ぎ、ヴァーチャルな映画討論会を実施する遠隔教育の実践(宮副2010)など、先鋭的な実践研究が行われてきた地域である。その後も、映像利用に関する研修が行われるなど、授業での映像作品利用への関心も高く、積極的な取り組みが進んでいるものと思われる。また、韓国の調査でも、高校や大学、民間の学校において、ICTと共に映像作品が

積極的に授業に取り入れられている状況が明らかになった(学会発表)。

文献調査では、映像作品を利用した研究について、日本語教育に限らず英語教育など他の外国語教育も対象に調査を行った。また、日本語教育においては、実践研究だけでなく言語研究での利用などを含めて幅広く先行研究を収集した。それをまとめて、日本語教育関係 336 件、その他外国語教育 181 件の文献リストができた(図書)。この調査でまず明らかになったのは、英語教育以外は、映像作品を利用した実践研究の報告が少ないということである。英語教育では「映画英語教育学会(<http://www.atem.org/>)」が 1995 年から毎年研究紀要を発行しており、それなりに研究の蓄積があるが、それ以外の外国語では、CiNii(国立情報研究所の論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/>)や大学の図書館で学会誌や大学紀要などを調査してみたが、実践研究や実践例をあまり多く収集することはできなかった。映像利用の効果を実証的に検証することは難しいと言われており、このため、論文や実践報告の数が限られているものと思われる。当初、先行研究から実践例を集めて授業デザインを蓄積することを視野に入れていたが、これは実現が難しかった。一方、文献調査の副産物として昔の日本語教育用映像教材の利用から現在の映像作品利用までの変遷を浮かび上がらせることができた(図書)。

映像作品を利用した日本語教育の全体像の体系化については、客観主義的学習観と構成主義的学習観を大枠に、映像利用の実態調査や先行研究の調査、基盤となる理論調査、研究メンバーの実践研究から得られたデータを基に検討を加えた。体系化を進める際に参考にしたのは、ブルーム(B. S. Bloom)らの「教育目標の分類学(ブルーム・タクソノミー)」とその「認知的領域」を改訂した「改訂版タクソノミー」(Anderson & Krathwohl eds, 2001)さらに、ガニエの学習成果の 5 分類(ガニエ他 2007)である。これらの考え方を基に、それぞれの授業実践が何を授業の目標や狙いとしているかによって、分類し、カテゴリーを抽出し利用体系の大枠のイメージを作成した(図書)。また、「改訂版タクソノミー」については、授業目標の分類に利用できるだけでなく、授業実践を分析・評価する枠組みとしても有効なことを報告した(学会発表)。

また、映像作品を利用する授業の目的領域の中から「話し言葉の教育」「文化面の教育」「メディア・リテラシーの教育」「構成主義的学習」の 4 つを取り上げ、各領域ごとに授業利用の基盤となる理論を検討し、それを基に、授業デザインの枠組みを検討した。同時に、検討を基に授業デザインを開発し、授業実践を行った。その結果、理論的枠組みに基づく、実践的に検討された授業デザインが蓄積された(図書)。今後ますます注目され

ると思われる構成主義については、勉強会を開催し、具体的な実践例を通して理解を深めることができた。

著作権調査では、芸術作品、娯楽作品という著作物を生教材(authentic material)として授業で利用する場合、学校教育法第 1 条に掲げられている小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、大学、高等専門学校、盲学校、聾学校、養護学校及び幼稚園などいわゆる「1 条校」においては、著作権法第 35 条「学校その他の教育機関における著作物の複製等」にある程度の例外的措置が認められていることが分かった。たとえば、教師が授業過程で使用する目的であれば、著作権者の許諾がなくても、ダビングは必要と認められる限度において認められており、非営利・無料という条件で授業中に学生に見せることもできる。また、教師や学生が著作物から必要な部分を引用してプリントを作成し、授業に必要な分だけコピーすることも可能である。しかし、市販の映像作品を他の教師や学生に貸し出すのは無料だとしても著作権の侵害になる(映画英語学会 2000)。著作権法には、これらの個別の事例については明記されておらず、具体的な利用に関する記述は法律の解釈によるものである。授業で映像作品を利用する教師は、普段何気なく行っている行為が著作権を侵害していないかどうか注意深く検討する必要がある。今後、映像作品は DVD や Blu-ray ではなく、ネット配信されたものを Web 上で利用することが多くなると思われるが、これに伴い、新たな著作権上の問題が発生することが予測される。(図書)

以上、3 年間の研究期間で、映像作品を利用した授業の体系化を図り、授業デザインの理論的基盤や実践的な枠組みを提示すると同時に、具体的な授業デザインを蓄積するという当初の研究目的は概ね達成することができた。本研究により、日本語教育における映像作品を利用した授業デザインの指針を構築することができたと考える。

ただ、授業デザインは、公表された先行例が少ないこともあり、当初想定していたほどの数は蓄積できなかった。今後の課題は、本研究で得られた知見に基づき、映像作品の利用の目的に応じた多様な授業デザインを開発するとともに、公開されているシラバスや最新の実践研究からも授業デザインのデータを収集し、蓄積していくことである。蓄積した授業デザイン・データは、教育現場で映像作品の使い方に戸惑っている教師を支援するために、広く一般に公開できるようにしたいと考えている。また、それぞれの領域毎の授業デザインの枠組みや授業デザインの進め方自体を公表し、日本国内や海外の映像利用に関心を持つ教師同士を繋いで、協働作業で授業デザインを行ったり、実践結果を共有できるようなプラットフォームが構築できればと考えている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

保坂敏子、奥原淳子、改訂版タキノミーを使った授業デザインの評価 - 映画・ドラマを用いた授業の場合 -、ヨーロッパ日本語教育、査読無、18巻、2014、pp.169 - 174

門脇薫、映画を利用した異文化理解のための授業デザイン、ヨーロッパ日本語教育、査読無、18巻、2014、pp.163 - 168

Gehrtz 三隅友子、保坂敏子、映像作品を利用した構成主義に基づく授業デザイン、2013年度 徳島大学国際センター紀要・年報、査読無、2014、pp.4 - 13

保坂敏子、Gehrtz 三隅友子、門脇薫、映像作品を利用した日本語教育の体系化に向けて - 海外における利用実態と教師の意識から -、2012年度 徳島大学国際センター紀要・年報、査読無、2013、pp.47 - 59

Gehrtz 三隅友子、交流と対話を通じた学内の連携を考える - 異文化交流の体験から何を学ぶのか」と「日本事情」の連携 -、2012年度 徳島大学国際センター紀要・年報、査読無、2013、pp.31 - 45

[学会発表](計13件)

保坂敏子、奥原淳子、改訂版タキノミーを使った授業デザインの評価 - 映画・ドラマを用いた授業の場合 -、第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2013年9月6日、マドリッド・コンプルテンセ大学(スペイン)

門脇薫、映画を利用した異文化理解のための授業デザイン、第17回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム、2013年9月6日、マドリッド・コンプルテンセ大学(スペイン)

保坂敏子、映画・ドラマに埋め込まれた文化的要素 - 異文化間理解重視の日本語教育のための分析 -、2013年東アジア日本語教育日本文化学会国際学術大会、2013年8月24日、新羅大学(韓国・釜山)

保坂敏子、異文化間理解のための映像作品の呼称の分析 - ラポールマネージメントに着目して -、2012年東アジア日本語教育日本文化学会国際学術大会、2012年11月11日、天理大学(奈良)

Gehrtz 三隅友子、交流と対話を通じた学内の協同・連携を考える、日本協同教育学会第9回全国大会、2012年9月22日、日本歯科大学

保坂敏子、Gehrtz 三隅友子、門脇薫、映像作品を利用した日本語教育の可能性 教師の利用実態と認識の調査から、2012日本語教育国際研究大会(ICJLE2012名古屋) 2012年8月19日、名古屋大学
Gehrtz 三隅友子、門脇薫、保坂敏子、映像

作品を利用した日本語教育と授業デザイン 授業を通じた気づき、2012日本語教育国際研究大会(ICJLE2012名古屋) 2012年8月19日、名古屋大学

門脇薫、保坂敏子、Gehrtz 三隅友子、海外における映像作品を利用した日本語教育 韓国における調査より、2012日本語教育国際研究大会(ICJLE2012名古屋) 2012年8月19日、名古屋大学

保坂敏子、映画・ドラマを通じた「学び」の可能性 I - 対話中心の聴解授業とメディアリテラシー -、2011世界日本語教育大会(2011 ICJLE 中国) 2011年8月21日、天津外国語大学(中国)

門脇薫、映画・ドラマを通じた「学び」の可能性 - 日本事情の授業デザイン -、2011世界日本語教育大会(2011 ICJLE 中国) 2011年8月21日、天津外国語大学(中国)

Gehrtz 三隅友子、映画・ドラマを通じた「学び」の可能性 - 対話を中心とした授業デザイン -、2011世界日本語教育大会(2011 ICJLE 中国) 2011年8月21日、天津外国語大学(中国)

[図書](計1件)

保坂敏子編、保坂敏子、Gehrtz 三隅友子、門脇薫、長谷川恒雄、塩崎紀子、奥原淳子、草野宗子、映像作品を利用した日本語教育の体系化と授業デザインの研究、エーエスエス、2014、182頁

[その他]

保坂敏子、映像作品を利用した授業とその評価、言語教育プログラム研究会、2013年1月例会(スピーカー) 2013年1月25日、桜美林大学

6. 研究組織

(1)研究代表者

保坂 敏子 (HOSAKA, Toshiko)
日本大学・総合科学研究所・准教授
研究者番号：0040913

(2)研究分担者

Gehrtz 三隅 友子 (GEHRTZ MISUMI, Tomoko)
徳島大学・学内共同利用施設等(留学生センター)・教授
研究者番号：20325244

門脇 薫 (KADOWAKI, Kaoru)
摂南大学・外国語学部・准教授
研究者番号：40346581

(3)連携研究者

長谷川 恒雄 (HASEGAWA, Tsuneo)
慶應義塾大学・名誉教授
研究者番号：10051567